

【資料】

トラウマ体験の言語化における素朴信念の崩壊

小沢哲史

The Collapse of Naive Beliefs in Verbalizing of Traumatic Encounter

OZAWA Tetsushi

要旨

トラウマ体験とは個人の処理能力の限界を上回った体験であり、生体のいくつかの防衛メカニズムが起動したものである。トラウマ後の生体反応は心身をばらばらにするが、反応の一つひとつは必ずしも病ではなく、生物として適応的な意味を持っていると考えられる。しかし、その体験はエピソード記憶として保持されたものではなく、そもそも言語野に情報が入力されず、言語化の前提を欠いている。このことは乳幼児期の早期トラウマの場合には、はるかに深刻なものとなり、名前のない体験として多くの機能が不全のまま成長する。しかし被害者自身も含めて、人々は言語というものは「たいてい何でも」表現できるものだと素朴に信じ、トラウマ体験にもそれを適用しようとする。これをトラウマの言語化についての素朴信念と呼ぶ。しかしこの素朴信念は多くの困難にぶつかる。他者に伝わるように情報を補完していく過程で「トラウマ体験」は真実から離れていく。被害者だけでなく、加害者、部外者、支援者においても自らの処理能力を凌駕する体験の重みから、沈黙や偽りへと向かう。さらに様々なメディアやエンターテインメントが「トラウマ」を扱っているが、悲劇と美談という似て非なるものにトラウマを置換してしまい、誤った見本となり、ますますトラウマの言語化を歪め、人々を沈黙と偽りのうちにとどめている。一部の者はトラウマ体験の言語化における素朴信念の崩壊を意識し、体験を「それ」「穴」などと形容する。私たちは被害者をはじめとしてどの立場の存在でもあり得、そしてどの立場の存在にもなり得る。さらに複数の立場を多重に兼ねていることもある。私たち全員が多重に当事者性を持つと考えられることから、誰もがトラウマの生物学的理解と言語化困難、そして素朴信念の崩壊への理解を深めていく価値があるだろう。

キーワード：トラウマ、言語化、素朴信念; trauma, verbalizing, naive beliefs

1. トラウマとは何か

1-1. 生存戦略としてのトラウマ反応

トラウマは現在進行形の現象である。それは現在における生物としての現象であり、心理的な現象であり、社会における現象である。医学的疾患の名称としてのPTSDも同様であり、今後も変更や修正が続くと思われる。性暴力、戦争、事故、災害、身体的虐待やいじめ等の攻撃性が明らかなものだけでなく、心理的な虐待やいじめ、ある種の言動やメディア視聴など、人と人との関係性やネグレクト、差別、貧困等の反復的あるいは継続的な状況も発生因となる。トラウマになるのは被害に遭遇した時点や、生理学的な

バランスが崩れた時点だけではない。心理的な解釈と生理的な条件や社会の変動の相互作用によって、遡及的に生じる可能性もある。トラウマが事後的に生じるのは、しばしば加害が計画的で構造的であるのに対して、被害者がそのことを認識するのが遅れるためである。

トラウマにまつわる現象は生命の進化と整合性のあるものである。生物あるいは生物種にとっての優先順位は生き残って遺伝子を受け継いでいくことにある。トラウマ体験には個人にとって生命の危機に遭遇したという側面がある。その結果、生物としての生存戦略が複数発動し、これらが解除されない限り、現在も危機に遭遇し続けているという状態である。ここではLevine (2015, 花丘 (訳), 2017) やvan der Kolk (2014, 柴田 (訳), 2016) ら身体的なアプローチを重視する研究者の見方を参考に、ポリヴェーガル理論や進化生物学的観点を加え、独自にトラウマについて記述する。まずトラウマ遭遇時には、身体機能の選択と集中が生じ、その事態に対応しようと利用できるエネルギーが増えた状態、すなわち興奮状態となる。次の段階として擬死反射に由来する機制が活性化し、身体の凍りつきや解離状態が生じる。進化的な意味としては、死骸を食べないという動物一般の傾向に活路を見出しているのか、あるいは自らの死が目撃されることで他の個人にトラウマを与えないといった意味があるのかもしれない。生き残った個人はトラウマ体験後も未完了に終わった危機に対して、飽くなき再戦を試みているかのよういつまで経っても過去が過去にならず現在時の痛みや苦しみがある。一方で、残存部分だけで活動できるよう解離し、被害を感じ取ることができない回避・麻痺状態にもなる。いずれにしてもより安全かつ安心した状態で活性化する社会的かかわりの機能低下が生じ、感情の統制困難や対人不信等が生じる。また被害体験が「そのまま」の形で被害者に再体験されるというフラッシュバックあるいは侵入体験がトラウマへの反応として知られている。しかし、フラッシュバックはトラウマ体験の全体像の中で被害者の感覚器官が断片的に受け取った情報が「そのまま」体験されているのであり、客観的に起きたことを「全体」として考えるなら、フラッシュバックはあくまで「部分」であるということがより適切な理解と考えられる。したがって了解しやすい語りである場合には、かえって事後的な情報によって全体像を補完している可能性がある。同時に、フラッシュバックは知覚や認知、感情、記憶、気分など様々な心的機能に断片的に反映されて再現され続けている可能性があり、現在時の状況に適合しない態度の豹変や正体不明の気分の落ち込み、非機能的な認知や言葉遣いなど、原体験とつながりを失った様々な現象にフラッシュバックの可能性を見しておくこともあり得るだろう。

さらにトラウマは、現在知られている症状の他に、免疫系や内分泌系、睡眠、摂食、消化、排泄、性、心肺機能、感覚・知覚、運動や操作、認知、気分や情動、言語、記憶、自己感覚、価値観等に広範な影響を及ぼしているが、検証および自己覚知が困難であるため、現状では、PTSD症状としてカウントされていない。また、被害に遭うと、声を出すことができず、天井等から自分自身と加害者を俯瞰している状態であったという証言にしばしば出会う。体外離脱体験である。解離の一種であると考えられるが、心身の痛みを感じないで済み、視覚的かつ俯瞰的な視点が生じる。進化の視点から見ると、事態を客観的に捉え、捕食者と自身の位置関係を特定することで闘争や逃走を有利にしようとする機能かもしれない。また自らの死を安楽に迎えるという最後の適応的な機制かもしれない。

1-2. ト라우マと言葉

心理学的に生命の危機に遭遇したというのは生体としての知覚であり、被害者が意識的にそのように認識したとは限らない。そもそも「何」が起きたのかを知覚したり認識したり、まして記憶に残せるかどうかは明確ではない。したがって言語化できる可能性は限られたものにすぎない。このこと

は、部外者のみならず被害者自身も含めて誤解されている点である。仮に侵入症状があり、自ら手続き記憶的には反復しているとしても、「それ」が何を意味しているのか、因果関係を把握できるかどうかかわからない。

被害者は「何も起きなかった」「何かあったけど忘れよう」と思っているかもしれない。まして様々な情報を統合しようと、推理したり言語化したり、エピソード記憶に留めたり、理解可能な語りにまとめようとはしないかもしれない。つまり脳内の処理機構としてトラウマ体験は情報を統合できるほど十分には言語機能や認知機能にたどりついていないのである。また被害体験がエピソードらしき語りにまとめられても、事後的な再構成であって感情が伴わないということがあり得る。さらに体外離脱体験が、物事をより高く広い視点から俯瞰した、客観的な認識の働きを活発化する一方で、主観的な体験としての被害の言語化を難しくさせている可能性がある。

社会正義の問題に取り組むジャーナリストのEmcke（2013，浅井（訳），2019）は、トラウマという用語を用いてはいないが、被害の認識の難しさを次のように記述している。

ある種の体験は、それを描写することが不可能だけではない。それを理解することからして不可能だ。極度の不正や暴力は1つの異変であり、それまでの生活でのあらゆる体験に矛盾する。人生に突如押し入ってくるそんな不正や暴力を体験した人は自分の身に何が起きたのか、理解することができない。それ以前の人生で起きたどんなこととも繋がりがなく、それまでの人生の中に到底組み入れることのできない出来事だからだ。かつての自分自身がどんな人間だったのか、周囲がどんな人間だったのかという理解の範疇に収まらない体験なのだ。さらに、そういった体験は、起こるべきこと、起きてもいい事の範疇から大きく外れている。その人の持つ道徳的な期待、他者とはどんな人であるべきか、ありうるかというあらゆる想像からかけ離れている。不正が文明社会に生きる人間にもたらす断絶はさまざまな層にわたり、自身との関わり方と世界との関わり方という二重の意味で、被害者の存在の根幹を揺さぶる。そして、その人の持つ規範が侵害されることで、暴力の内部と外部、すなわち被害者と部外者の間の亀裂はますます深まる。（Emcke，2013：浅井（訳），2019，p10）

支援者の立場から花丘（2021）は、ポリヴェーガル理論を根拠として、性被害に遭った人の無抵抗や、承諾にも見える行動が、背側迷走神経系の活性化による「凍りつき」であり、その凍りつきが生じている時には、十分な判断や拒否的な行動など採りようがないということへの社会全体の理解を求める。すなわちトラウマ体験における無抵抗や沈黙は生物学的な基盤を持つ自然現象である。

トラウマ体験の表現は、沈黙だけに留まらない。語りにおける空白、わかりにくさ、矛盾、偶発性、語り直し等はトラウマの語りにあるものである。Emcke（2013：浅井（訳），2019，p117）は被害者の語りについて「興奮した、混乱した、疲れ切った、切れ切れの、あまりに空白だらけの話に見えるかもしれない。」と述べている。これらの言葉とそれに伴う感情は、聞く人を困惑させる性質をもつものである。聞き手がトラウマと言葉について理解がない場合には、二次加害のきっかけになることがあるだろう。

1-3. 乳幼児期および児童期のトラウマ —名前のない問題—

言語能力が獲得される以前、エピソード記憶の成立以前のトラウマ、すなわち早期トラウマとなるとどうであろうか。被害者は、自身のトラウマが埋め込まれた手続き記憶を反復し、身体症状や感情障害、思考障害、行動障害に悩むとしても、そのことをトラウマと明確に関係づけることはあまりにも難しい。そ

もそも言語を含めて様々な脳部位に萎縮等の影響が及んでいる可能性もある。また虐待等であれば、家庭内のことを外部には話させない“沈黙の掟”があるとされる。

仮にある程度言語能力を獲得したところで、それは証言に役立つ語彙ではない。自らの感情や認知の揺れ動きを親と語り合い、共に調整していくのが言語の獲得過程において本質的な体験であるが、虐待サバイバーはそういった経験がない。児童期虐待を生き延びた人々の治療にあたっているCloitre et al. (2006: 金 (監訳), 2020) は次のように述べている。

多くの虐待サバイバーは、虐待後数年経った後でも、最も大きく感じる気持ちは混乱であると述べている。混乱は気持ちというよりは、患者の置かれている状態の正確な表現である。虐待を受けた子どもの家庭ではトラウマの存在を秘密にしたり、否認することが普通なので、この種のトラウマは「名前のない問題」にされてしまう。もし何十年もその問題に名前を付けてこなかったのであれば、それに伴う気持ちに名前がなくても不思議ではない。言葉には体験を整理する力がある。自分の体験に名前がなければ、虐待サバイバーは自分が子どもの時にどう感じていたのか、今自分が正確に何を感じているのか、または子どもの頃と大人になった今の気持ちが、子ども時代の出来事にどう結び付いているのかがわからない。(Cloitre, et al., 2006: 金 (監訳), 2020, p142)

虐待被害者の言葉は、気持ちの言語化にすでに行き詰まっているため、あくまで外の世界に適応するための言葉であり、見かけの正常さを保つための言葉となっている。近年、数多くの暴力（性被害やハラスメントを含む）の告発が相次いでいるが、乳幼児・児童期虐待への沈黙は残り続けるであろう。

2. トラウマ体験の言語化における素朴信念

2-1. トラウマ理解における言語の限界

私たちは、通常自らの経験の重要な部分を知覚し、必要に応じて記憶とし、管理し、言語化して語れると信じて生活している。重要でない細部でさえも記憶し、語れると感じているかもしれない。これを言語への素朴信念と名づける。聞く側も同じである。言葉を聞けば、必要な情報が理解できると信じている。

私たちは、「トラウマ」という言葉を読んだり聞いたりした場合でさえ、「トラウマ」という言葉を引き金とした長期記憶を賦活させてしまう。それはトラウマというより、トラウマという言葉とそれに関連した長期記憶に過ぎない。実体としてのトラウマは言語野や大脳皮質に情報があるのではなく、より下位の脳部位や身体が記憶している。したがって被害者自身を含めて、私たちが通常抱くトラウマのイメージは、あくまでイメージである。それらは情報が補われ、客観的視点からわかりやすく提示し直された別物である可能性が低くない。例外として「トラウマ」という言葉がトラウマになっている場合を除いて、私たちが通常抱くトラウマのイメージは、実際のトラウマ体験とその反応過程とはまったく異なる。このことはいくら強調しても強調しすぎることはない。話し手と聞き手が、言語への素朴信念を抱いたままでは、仮にトラウマについての知識があったとしても限界のあるやりとりに留まることは少なくないと思われる。

2-2. トラウマの言語化への誤解がもたらす問題

トラウマの言語化への誤った素朴信念（言語化幻想）は、加害者や部外者による被害者への「言って欲しかった」「言ってくれさえすれば」という事後的な言語化期待言説や、自殺等の悩み対策として「言ってみよう／相談してみよう」という言語化期待に基づいたキャンペーンに見いだすことができる。また

その枕詞としての「勇気を出して」という文言は、声をあげた被害者やトラウマから回復した人たちを称揚する一方で、自発的に沈黙を選択したり、そもそも被害が言葉にならない——それは自然現象である——被害者をいっそう自己否定に向かわせる可能性がある。

また部外者や社会全般にとっては、被害者がトラウマを言語化しさえすればある程度解決するのだという暗黙の、しかし生物学的根拠の不十分な前提に知らず知らずに染まることにもなる。

さらに問題が生じることもある。トラウマの言語化への素朴信念は、偽りの被害証言という「言葉の一人歩き」を生み出すのである。その結果、人間の歴史においては、流言飛語、誹謗中傷、讒言等の偽りの被害証言によって、多くの犠牲や冤罪が産み出されてきた。

2-3. メディアとエンターテインメントの功罪：悲劇と美談、偽りへの誘惑

人間の歴史において、そして特に現代社会において、ニュース報道やバラエティ番組、映画や小説等、メディアによってトラウマ性の被害が描かれることは多い。そこではプレゼンテーションのプロが複数関わって明瞭にわかりやすく伝達している。しかし上述してきた通り、実際のトラウマ遭遇の際、被害者はそもそも伝達に必要な情報を得ておらず、メディアで示されるそれらしいエピソードとは似て非なるものである。またメディアは被害と同時に対応策を呈示しがちであったり、さらには必ず終了があったりするために、トラウマが過去の体験ではなく、現在進行形の未解決の痛みと苦しみであるという本性は感覚的に理解しにくい。すなわちトラウマは、まさにそのトラウマの本性を不可視化・遮音する方向で伝達されると言える。メディアはトラウマ体験を、すべての立場の人間にとって物語の一形式としての悲劇へと置換していると言えよう。

このようなプロセスにおいて私たちは、知らず知らずのうちに、被害者が100%の善玉、加害者が100%の悪玉であるとみなしたくなってしまふ。このことは、現実における白でも黒でもないグレーなトラウマ体験の被害者の側にも非が見え隠れすることで被害そのものを疑問視あるいは軽視することに加担してしまう。このことも実際の被害の言語化が躊躇される結果に結びつく。また被害者は自らの“非”に自己嫌悪に浸る一方で、自らの語りを悲劇としてより純粋に響くように少しずつ偽る誘惑にさらされる。

さらにメディアではトラウマからの回復事例や支援者の自己犠牲的で正義や思いやりのあるふるまい、勧善懲悪等の美談が伝えられる。そのような美談に回収されたエピソードはさらにわかりやすくなってしまふ、かえってリアルな被害者の言説は理解しにくいものとなり、疑念や不信感につながってしまう。

まとめると、トラウマ体験がメディアで取り上げられるということは、悲劇と美談という表現型にはめこまれるということである。被害について人々が知ることになり、そのことから認知や救済措置などの恩恵が得られる可能性がある一方、トラウマの本質である現時の痛みや苦しみが昇華されて伝わりにくくなっていると言える。

3. 立場別のトラウマの言語化：被害者

ここからは被害者、加害者、部外者、支援者（研究者）といった立場の違いによるトラウマ体験に対する沈黙、言語化困難、偽り、そしてトラウマの言語化についての素朴信念の崩壊について述べられた言葉を確認していきたい。最初に被害者に焦点を当てるが、言葉を残しているのは、稀有の立場に居合わせ、強い精神力があり、圧倒的に高い言語能力に恵まれた人々であり、大多数の被害者に同様の言語化が可能であるとみなすことはできない。また遡って体験そのものの痛みや苦しみの感覚も異なる可能性がある。

3-1. 被害者の素朴信念の崩壊、沈黙と言語化困難

そもそも被害者は誰なのかについて前提を確認しておきたい。このことについて中井（2005）は「戦争はいくら強調してもしたりないほど酸鼻なものである。しかし、酸鼻な局面をほんとうに知るのは死者だけである。『死人に口なし』という単純な事実ほど戦争を可能にしているものはない。」と語る。死者こそが本物の被害者であるということはあまりに身も蓋もない事実であるのだが、前提として確認し、その上で以降は生き延びた、少なくとも死ななかつた、被害者について検討する。

まず先述したEmckeは、被害の言語化に対する素朴信念の崩壊を次のように述べている。

こうして苦しみと暴力とは、言語上の問題となる。苦しみと暴力の体験は、被害者にとって、言葉で描写できないものに思われる。それを体験した者自身にも理解することができない、それまでの体験の全てを上回るおそれのある体験だからだ。恐怖と戦慄の前には、通常言葉はあまりに平板に響く。現実には体験した惨事を描写しようと思えば、言葉を一言ずつ「それ」に当てはめていくしかない。(Emcke, 2013: 浅井(訳), 2019, p11)

本来人間に属する体験は人間的なものであり、社会的なものであるが、トラウマ体験は異なる。被害者は、体験を「それ」として自分のうちにありながら、自分ではないものとして、非人間的でつながりを絶たれたモノとして感じ、「それ」の脅威を感じながら過ごし、フラッシュバックにおいては終わりの見えない現在の戦いをしながら過ごしている。「それ」という言葉は情報が極限まで縮減されており、あまりにもモノ的である。それゆえに「それ」はトラウマ体験を象徴する言葉と言える。

続いてホロコーストを生き延びたFlankle（1977: 池田(訳), 2002, p8）である。彼は被害者ではあるが、被害に遭う前にすでに一人前の精神科医であり、収容所に自作の原稿を持ち込もうとしている。したがって被害者の中でも並外れて精神力があり、言語能力が高かったとみなせる。彼は被害者たちの沈黙を次のように報告する。

経験など語りたくない。収容所にいた人には説明するまでもないし、収容所にいたことのない人には、わかってもらえるように話すなど、とうてい無理だからだ。わたしたちがどんな気持ちでいたのかも、今どんな気持ちでいるのかも。(Flankle, 1977: 池田(訳), 2002, p8)

自らもいじめの被害者でありつつ医師(支援者)の立場から、中井(2004)は、以下のように報告している。

一般に外傷関連障害は決して発見しやすいものではない。葛藤を伴うことの少ない天災の場合でさえ、アンケートをとり、訪問しても、なお発見が困難なぐらいである。人災の場合になれば、患者は、実にしばしば、誤診をむしろ積極的に受け入れ、長年その無効な治療を淡々と受けていることのほうが普通である。外傷関連患者は治療者をじっと観察して、よほど安心するまで外傷患者であることを秘匿する。(中井, 2004, p96)

トラウマを言語化する痛みや苦しみは、誤診や長年の無効な治療を受け入れるより大きいということであり、PTSDあるいは複雑性PTSD、解離性障害等を抱えている人々は、多くの人が思っているよりはるかに多数存在するということを示唆している。ただし患者自らがトラウマと症状との因果関係や言語化への

素朴信念の崩壊を自覚できているとは限らないことに留意したい。

早期トラウマの被害者は言語能力自体が身につかなかったため、最も言語化が難しい。ここでは、Auster (1985:柴田 (訳), 2009) による「ガラスの街」という小説に出てくるピーター・スティルマン (子) の語りを代入しておきたい。父のピーター・スティルマンは、息子のピーター・スティルマンを人間的接触を絶つ暗闇に長期間放置し、その状況で息子の話す言葉に「新しい言語」を見出そうとする。言葉は生まれついた文化的環境に固有の言語が、養育者など周囲との社会的関わりを通じてのみ学ばれるものであり、暗闇に放置したところで、「新しい言語」が発生するわけではない。救い出されたピーター (子) は遅れて“母”国語を学ぶが、その語りには矛盾があり、空白があり、社会的かかわりを欲しながら同時に回避しており、言語の基本的な伝達機能が損なわれている。ピーター (子) の語りの冒頭部分のみ以下に記す。

「質問はなしでお願いします」と若い男はやっと言った。「はい。いいえ。ありがとうございます」。しばし間を置く。「僕はピーター・スティルマンです。これは僕自身の自由意志で言っているのです。はい。それは僕の本当の名前ではありません。いいえ。もちろん、僕の精神は完全な状態ではありません。ですがそれについてはどうしようもありません。いいえ。それについては。いいえ、いいえ。もういまとっては。」(Auster, 1985 : 柴田 (訳), 2009, p24)

3-2. 悲劇と美談、偽りへの誘惑

すでに述べた通り、トラウマ体験は悲劇と混同されており、それだけに社会はともすれば美談で回収できると誤信している。これに染まった被害者も自らの語りを悲劇にしようとして、偽りへの誘惑にさらされる。

被害者であり研究者である小松原 (2022) は、被害者が悲劇や美談、偽りへの誘惑に囚われることに気づき、あえて語る。

私が語ったのは、嘘がたくさん含まれた物語である。都合の良いところだけを書いたし、ここで描かれるのは「こうあって欲しい私」の話だ。できるだけ楽しい場面も盛り込んで、ギリギリでハッピーエンドになるようにしておいた。(小松原, 2022, p199)

Auster (1985:柴田 (訳), 2009) はピーター (子) の妻ヴァージニアと主人公ポールとの会話として、ピーターの言葉が偽りである可能性を次のように述べる。

「特に初めての方は」と彼女は続けた。「ピーターの話が聞かれて、その大半、ひどくとまどわれるだろうと思います。私、隣の部屋でピーターの話聞いていました。ピーターの言うことはつねに事実だという前提に立たれてはいけません。といっても、嘘をついているのも間違いでしょうが。」「つまりある部分は信じるべきであり、ある部分は信じるべきではないということですね。」「そのとおりです。」(Auster, 1985 : 柴田 (訳), 2009, p41)

3-3. 日常性を維持する（前に進む）ための沈黙と偽り

言葉とその言葉が真実ではないことの葛藤は、他者からの承認と、社会的かかわりの中で生きていくことが優先されるため、真実が敗北する。沈黙と偽りは適応的なことである。多くの被害者は語ってこなかった。生活を続けることを優先すべき状況があって、また聞く耳を持つ人がおらず、語る意味がなかったと推察できる。先述したEmckeは、こうした沈黙について以下のような記述で示している。

そして、語らない人たちがいる。暴力と権利剥奪の体験を自身の内に閉じ込めた人たち、いや、または逆に、暴力と権利剥奪の体験に閉じ込められた人たちだ。彼らは沈黙する。話すことができないから、または話したくないから。言葉を見つけることができないから、または、耳を傾けるものがないから——それは、彼らの体験が「言語に絶する」もので、とても語ることなどできないからなのだろうか？

彼らはなぜ沈黙するのか。壮絶な経験の後に沈黙を求める者、生還者として、痛みを伴う記憶を再び呼び起こすことをためらうもの——彼らの姿勢は尊重されねばならない。沈黙の理由を問うことは、沈黙を受け入れないこととは違う。むしろ逆だ。沈黙の理由を問うことは、その沈黙を理解することであり、それが我々——被害を免れた者、後から生まれたもの——と関係があるのではないかということなのだ。沈黙は被害者を守るものなのか、それとも加害者または我々を守るものなのか、または被害者が生きる社会を守るものなのか問うことなのだ。(Emcke, 2013: 浅井(訳), 2019, p81)

またホロコーストを生き延びたLevi (1986, 竹山(訳), 2019)は被害者の語りの偽りを次のように述べる。

明らかに、これらの語られたことを、そして今度彼らにより、彼らの間で語られるであろう他の証言を(まだ私たちのもとには届いていない)、文字通りに受け取ることができない。この究極の剥奪状態を経験した人間からは、法律用語的な意味での証言は期待できない。それは嘆き、悪態、贖罪の言葉がまざりあったようなものか、自らを正当化し、自らを回復する努力のようなものでしかない。メドゥーサの顔を見たものからは、真実よりも、自らを解放する感情の吐露しか予期できないのである。(Levi, 1986: 竹山(訳), 2019, p65)

4. 立場別のトラウマの言語化：加害者

加害者もまた沈黙と偽りに従事する。沈黙によって訴追や罰を免れ、否認の中で生き延び、家族や仲間との生活を続けようとするためである。加害者が沈黙を破る場合には、加害を誇る時や開き直った時である。加害者が口を開いた場合でも、被害者の非をあげつらうことで責任転嫁を行い、被害の矮小化を意図し、あわよくば自分こそ被害者であると主張して、自らの意図性や責任を逃れようとする。戦争犯罪や虐待などであれば、時代の大義ややむにやまれぬ状況に言及した正当化が行われるのが常である。

また加害者は加害している時点から、加害を矮小化し、無にするような言葉を被害者に言い聞かせ、また周辺にも触れ回る。被害者に謝罪や感謝を強要したり、喜んで自ら加害を受けたと思込ませようとしていたり、服従を誓わせるのはありふれた手口である。また加害の前後に、被害者の孤立を招くようなネガティブ・キャンペーンを周囲の集団に行ったり、被害者に別の加害に参加させることも一般的なことである。

う。その結果、被害者は自分のどこかが悪かったに違いないという自己否定感、誰かを傷つけているのではないかという加害者意識と罪悪感を抱いていることは少なくない。トラウマ研究の重鎮であるHerman（1992，中井（訳），1997）は、下記のように記している。

秘密を守らせ口をつぐませることは加害者の第一防衛線である。もし、秘密が暴かれたならば、加害者は被害者の証言の信憑性をあげつらう。もし被害者の口を完全につぐませられなかったならば、加害者は誰も彼女の言に耳を傾けないようにする。この目的のために、彼は堂々の論陣を張る。もっとも厚顔無恥な否認から始めて最もエレガントでソフィスティケートィッドな合理化までをずらりと揃える。（Herman, 1992：中井（訳），1997，p4）

時に加害者の被害者に対する優位性は圧倒的である。それは加害についてだけでなく、証拠の隠滅にまで及ぶものである。Levi（1986：竹山（訳），2009）は、加害者である兵士たちの次のような語りを報告している。

SS（親衛隊）の兵士たちが囚人に、次のような冷笑的な警告をして喜んでいたことを記憶している。「この戦争がいかように終わろうとも、お前たちとの戦いは我々の勝ちだ。生き延びて証言を持ち帰れるものはいないだろうし、万が一誰かが逃げ出しても、誰も言うことなど信じないだろう。おそらく疑惑が残り、論争が巻き起こり、歴史家の調査もなされるだろうが、証拠は無いだろう。なぜならわれわれはお前たちとともに証拠も抹消するからだ。そして何らかの証拠が残り、誰かが生き延びたとしても、お前たちの言う事はあまりにも酷で信じられない、と人々は言うだろう。それは連合国側の大げさなプロパガンダと言い、お前たちの事は信じずに、すべてを否定する我々を信ずるだろう。ラーゲル(強制収容所)の歴史は我々の手で描かれるのだ。」奇妙にも囚人たちもこれと同じ考えを持っていた。「もし語ったとしても信じてもらえない。」（Levi, 1986：竹山（訳），2009，p9）

小説中ではあるものの息子を暗闇に長期間放置するという苛烈なネグレクトを行ったピーター・スティルマン（父）は、自らの加害の大義を「新しい言語の発明のため」とし、次のように語っている（Auster, 1985：柴田（訳），2009，p124）。

「人間が語るべきことを、ついに語ってくれる言語です。私たちの言葉はもはや世界に対応していません。物たちがまだ損われていなかった頃は、言葉によって物たちを言い表せるものと人間も自信を持っていました。ところが少しずつ、物は壊れ、砕け、崩壊して混沌へ墜ちていきました。にもかかわらず、私たちの言葉は以前と変わっていません。新しい現実に対応していないのです。したがって、目で見たいものを語ろうとするたび、人は誤った言葉を話しているのであり、言い表さんとする物をゆがめてしまっているのです。そのせいで何もかもがめちゃくちゃになっています。ところが言葉というものはあなたもご承知の通り、変わり得るものです。問題はそのことをどうやって示すかです。」（Auster, 1985：柴田（訳），2009，p124）

興味深いことにSS（親衛隊）の兵士たちも、ピーター・スティルマン（父）も、加害者であるにもかかわらず、被害者が感じる沈黙の掟や言語化への素朴信念の崩壊をまさ知っている。このことはトラウマ

という用語によって被害が可視化され、声が上がらずと以前から人間の歴史において、連綿とトラウマの連鎖が生じてきたことを示唆しているようにも思われる。

5. 立場別のトラウマの言語化：部外者あるいは社会

5-1. トラウマと社会

トラウマの問題は、社会における暴力の問題であり、トラウマ体験をどのように扱うかは、その社会における正義の実現と深く関わっている。トラウマが見逃され、沈黙を強いる社会では、個人の権利は制限され、当事者だけの問題ではなくなってくるのである。先述したEmckeは以下のように述べる。

沈黙の理由への問いは、本質的な問いである。というのも沈黙の原因がどこにあるか——例外的な極限状況、被害者のトラウマ、または／および、暴力を一度は容認し、いまになってその過去と向き合わねばならない社会——によって、目撃証言が担う課題も変わるからだ。被害者の沈黙を不変のものだと主張すること、極度の暴力の被害者を「むき出しの生」という存在へと収斂させること、ある種の体験を「言葉にできないもの」だと決めつけることは、被害者のトラウマの深刻さを認めるといふ善意の観点に由来するものかもしれない。しかしこういった観点は同時に、沈黙を推奨するもの、語ることを妨げるものなかには我々の生きる社会もまた含まれるのではないかという問いから、目をそらす結果をも招く。(Emcke, 2013: 浅井(訳), 2019, p82)

アメリカ社会においてトラウマという概念が、広く議論されるようになったのは、ベトナム戦争の後であった。アメリカという国が個人を尊重し、自己表現に適した社会を展開しているにしても、トラウマという概念を取り沙汰するようになったのは第二次世界大戦でも朝鮮戦争でもなく、ベトナム戦争の後なのである。すなわち、その組織や社会の進む方向が比較的明瞭である時代には、個人病理として概念化されたトラウマは取り沙汰されにくいようである。

日本においてトラウマという概念が広く議論されるようになったのは、太平洋戦争後の復興も高度成長期やバブル景気も終わった阪神・淡路大震災の後であった。武器を用いた戦争を経済戦争に変えたり、次世代にトラウマを連鎖させる受験戦争に置き換えた数十年を経て、日本人の個が成長してきたことで、ようやくトラウマを扱うことができるようになってきたのかもしれない。

もし沈黙によって、組織や社会が円滑に進むという見込みがあれば、被害者、加害者のみならず、社会全体に沈黙への圧力が再び生じることが想像に難くない。

5-2. 弱さへの嫌悪と恐れ

それではトラウマと向き合うことを難しくさせる組織や社会とはどのようなものだろうか。それは強い精神力に依存せざるを得ない組織や社会である。PTSDの前身とも言える戦争神経症について日本が隠蔽してきたことは、近年になって明らかにされている(中村, 2018)。そこでは、医師だけでなく、国やメディアが一体となって、日本人の精神力を称揚するという集団的なナルシズムによる現実否認とも言うべき現象が見られるのである。

満州事変以降の皇軍意識の高唱と「日本精神」の強調の流れの中で、日本軍には恐怖・不安が原因で戦争神経症になる将兵はいるはずもないとされたのである。さらにとりわけ日中戦争の初期におい

て、陸軍省医務局や国府台陸軍病院関係者による戦争神経症の隠蔽の動きが見られる。1938年10月26日陸軍省医務局医事課長・鎌田調は、貴族院における口演で「世界戦争に於いて欧米軍に多発致しましたる戦争神経症なる精神病は幸にして一名も発生致しませぬことは、皇国民特質士気の旺盛なることを如実に示すものでありまして、皇軍の誇と致す所であります。」と述べた。（中村，2018，p62）

一方、医学的には戦争神経症の存在が認められていたアメリカ軍の兵士においても、現実には弱さとして蔑みの対象となっており、皮肉なことに「アジア風になった」と形容しているのである。トラウマへの反応は本来生物としての生存戦略である。そのメカニズムは捕食生物との戦いを有利に進める可能性も少なくなく、生物としての強さの表れであろうが、現実には心の弱さで見なされ、その言語化には圧力がかかってきたのである。特に、人間の歴史で互いに直接的に戦ってきた男性において、“弱さへの嫌悪と恐れ”による沈黙への圧力は生じやすいと言える。

6. 立場別のトラウマの言語化：支援者（研究者）

6-1. 聞き手における生物学的限界

被害者が被害を言語化できないことが生物学的な現象であるのと並行して、聞き手の側にも生物学的な限界がある。聞き手は言葉を聞く以上、その言葉を自身の長期記憶にアクセスして照合し、評価してしまう。私たちが言語的な処理をする以上、その言葉の意味を考え、自分自身の経験と照らし合わせることは、生物学的な情報処理プロセスである。私たちは生物学的に言語化への素朴信仰を持っている。しかしトラウマについてはそのことがまさに裏目に出してしまうことがある。支援者にとっても、自身の処理能力を超えてしまうからである（二次受傷、代理受傷）。このような混乱を体験したHermanは支援者についても被害者と同様の苦悩に陥ることを報告している。

犠牲者と同じく証人も外傷の弁証法に翻弄される。観察者が頭脳明晰で平静であり続けながら、絵の幾片かの断片を同時にたくさん見せられて断片の全部を記憶にとどめ、それをつなぎ合わせることは至難の技である。見たものを完全にしかも説得力を持って伝える言語を発見することはいっそう難しい。（Herman, 1992：中井（訳），1997，p. Xiii）

6-2. 被害者と支援者の複線関係

留意しなくてはならないのは、被害者と支援者が常に同盟関係にあるわけではないということである。たとえば支援者にとって被害者は、彼らを断罪してくる加害者のように思えるかもしれない。また、支援者が寛容さと穏やかさ、明るさや優しさ、辛抱強い理解力をもって心を開きさえすれば、言葉が発せられるのかといえばそうではない。被害者は被害体験においてまさに加害者の肯定的で前向きな言動に裏切られ、信頼感を喪失したのである。

被害者の怒りは、加害者に向けられるだけでなく、しばしば支援者に向けられる。被害者にとっては加害者との関係の方が慣れ親しんだ状況であり、支援者の出現の方が不慣れで不安と警戒を呼び起こすものであるからかもしれない。また支援される中で、行き違いから二次加害があったのかもしれない。あるいは恵まれた立場のように見える支援者との運命の違いへの癒しがたい羨望があるのかもしれない。そもそも被害者のコミュニケーション・スキルは、加害を避けるためのものであったり、加害者から学びとっ

た攻撃的なスキルであり、他のスキル、例えば支援者に対してどのように愛情や感謝を伝えるのかというコミュニケーション・スキルには馴染みがないのかもしれない。いずれにしても、被害者と支援者の関係は不安定なものであり、このことから支援者が被害者のトラウマについて語ることは容易ではない。

6-3. トラウマの言語化の素朴信念への気づきと転回

上述の通り、支援者と被害者の関係は不安定であり、双方を兼ねているとさえ言える。そこでその苦闘に満ちた言語化は、ある種の達成感と大いなる諦めと共に、いったん一点を指し示す瞬間があるようである。トラウマの言語化についての素朴信念が意識され、その崩壊に打ちのめされ、そして転回した地点である。Emckeは言語化の苦闘を記述する中で、「それ」という極限まで縮減された言葉を用いた。また小松原(2022)は「穴」と呼んでいる。

たとえ語り得ない物語の「穴」がそこに開いていたとしても、私はその空洞の周囲をぐるぐる回りながら語ることで、「ここに穴がある」と示すことができるだろう。(小松原, 2022, p29)

宮地(2007)は「核」、「ブラックホール」と形容し、また彼女が構築した環状島モデルにおいては外海や外斜面からは不可視の「内海」としている。

本書で述べようとする事は、ある意味で単純である。それはトラウマが語られる、もしくは表象される空間は中空構造であるということである。トラウマの真っ只中にいるものは声を出せないし、生き延びることができなかった死者が証言することもできない。トラウマの核はブラックホールのようなものであり、だれもその中心にまで迫ることはできない。(宮地, 2007, p9)

7. まとめ

本研究は、トラウマへの反応を個人の生存戦略として捉えると同時にはるかに広汎な範囲に及んでいる可能性を指摘した。またトラウマ体験の言語化については生物学的に困難がある。しかし、私たちは、トラウマに対しても言語化への素朴信念を抱き続けるため、その言葉は、わかりにくさや矛盾や混乱が含まれたり、わかりやすい悲劇や美談、偽りに置換されている。また被害者だけでなく加害者や支援者、部外者といったどの立場からも適切な言語化は困難であり、それは社会のあり方にもよることを論じた。精神力や言語能力の高い一部の人は、トラウマ体験を「それ」、「穴」などと形容するなどして、トラウマの言語化への素朴信念の崩壊を意識し、転回している。私たちはトラウマに関して、どの立場の存在でもあり得、そしてどの立場の存在にもなり得る。また同時にいくつもの立場を兼ね得る。したがって私たち全員が、多重に当事者性を持つと考えられ、誰もがトラウマの生物学的性質や言語化の困難、そしてトラウマの言語化への素朴信念の崩壊体験への理解を深めていくことが重要であると考えられた。

引用文献

- Auster, P., (1985). CITY OF GLASS. Sun and Moon Press. [オースター, P., ガラスの街 柴田元幸 (訳) (2009), 223p., 新潮社]
 Cloitre, M., Cohen, L. R. & Koenen, K. C. (2006). Treating Survivors of Childhood Abuse. Guilford Press. [クロアトル, M., コーエン, L. R. & ケーネン, K. C. 児童期虐待を生き延びた人々の治療 金吉晴 (監訳) (2020), 355p., 星和書店]
 Emcke, C. (2013). Weil Es Sagbar Ist. Fischer Verlag GmbH. [エムケ, C. なぜならそれは言葉にできるから 浅井晶子 (訳) (2019), 245p., みすず書房]
 Frankl, V. E. (1977). EIN PSYCHOLOGE ERLEBT DAS KONZENTRATIONSLAGER. Kosel- Verlag. [フランクル, V. E. 夜と霧 新版 池

- 田香代子（訳）（2002），184p., みすず書房]
- Herman, J. L. (1992). Trauma and Recovery, New York : Basic Books, A Division of Harper-Collins, Inc. [ハーマン]. L. 心的外傷と回復 中井久夫（訳）（1997）., 418p., みすず書房]
- 小松原織香 当事者は嘘をつく 2022, 204p., 筑摩書房
- 花丘ちぐさ なぜ私は凍りついたのか 2021, 347p., 春秋社
- Lavine, P., A., (2015).TRAUMA AND MEMORY. [ラヴィーン, P., A. ト라우マと記憶 花丘ちぐさ（訳）（2017）, 240p., 春秋社]
- Levi, P. (1986). I sommersi e i salvati, Giulio Einaudi Editore S.p. A., Torino. [レーヴィ P., 溺れるものと救われるもの 竹山博英（訳）（2019）, 304p., 朝日文庫]
- 中井久夫 徴候・記憶・外傷 2004, 404p., みすず書房
- 中井久夫 戦争と平和についての観察 森茂起（編）埋葬と亡霊 2005, 257p., 人文書院
- 中村江里 戦争とトラウマ 2018, 316p., 吉川弘文館
- 宮地尚子 環状島＝トラウマの地政学 2007, 228p., みすず書房
- van der Kolk., B. (2014). THE BODY KEEPS THE SCORE. [ヴァン・デア・コーク, B., 柴田裕之（訳）.（2016）, 682p., 紀伊国屋書店]

小沢 哲史（和洋女子大学 人文学部 心理学科 教授）

（2023年12月12日受理）